



TITLE:

<批評・紹介> オルガ・ラング著,  
小川修譯「中國の家族と社會」

AUTHOR(S):

狩野, 直禎

---

CITATION:

狩野, 直禎. <批評・紹介> オルガ・ラング著, 小川修譯「中國の家族と社會」. 東洋史研究 1954, 13(1-2): 149-151

ISSUE DATE:

1954-04-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138993>

RIGHT:

## 批評・紹介

## 中國の家族と社會 I

オルガ・ラング 著  
小川 修 訳

昭和二十八年四月 岩波書店  
現代叢書版 二五四頁 二二〇圓

最近數年の間に中國社會に起つた數々の變革の様相は、中國よりの歸國者や、或は内・外の學者及びジャーナリスト達の手によって我々に知られつゝある。それらの中で特に我々の注意を惹きつけるものゝ一つに、家とそれに附隨する様々の人間關係の問題がある。それは我が國の民主化を阻んでいるものゝ根底に横わつてゐる問題であり、中國に於ても、極く最近までその様に考えられていたものであるからである。それは著者の言葉を借りれば「二〇世紀にはじまつた中國民族の社會的・民族的解放の闘争にとっては、かれらが家に對して獻身的でありすぎたことが大きな障害」であつたのである。現在我々は今一度、日本の「家」の現實の姿を顧みる必要に迫られてゐるのであるが、その際一つの手掛となるのが、こゝに取上げたオルガ・ラングの「中國の家族と社會」で、この書は、障害となつてゐた時代の、この家族の問題を取り上げて、詳細なる調査と、それに加うるに廣い文獻的知識を以てし、更にこれに對する社會的經濟的背景をも盛り込んで述べられたものである。

ラングはこの問題をどんな態度で取扱おうとしたか。それは次の三點に要約されう。一) 家——中國の社會制度全体の中で最も代表

的なものゝ一つである——を理解することにより、中國人の生活とそれをつくつてゐる男女の態度の理解を助ける。二) 中國の家族を研究することにより、家族というものの、一般の構造や機能などを理解し、また西洋社會に於いて家族生活の分裂がつくり出したところのきびしい諸問題を理解するのに役立たせる。三) 文化の變遷の過程を研究するための場として扱う。併し私は(一)及び(三)の點に於いて、特に(一)の點から見た場合のこの書を、高く評價したい。(二)の點については、現在我々は家族の分裂以前の段階に在つて、之に苦しみ之を解決しようとしてゐるのであつて、家族の分裂した歐米の人々が持つてゐる問題と自然に異つてくるから、(二)の點については、一應評價の外においておくことにする。

さて本書を特に第一の點で高く評價する所以は、概して過去の、中國の家の問題を扱つたものが、兎もすれば抽象的な、家族構造論的な、靜的な傾向に陥つてしまつて、人間生活の場としての家の觀點より捉えられることが少なかつたのに對し、本書ではこれが、具體的な生き生きとした姿で描き出されてゐるからである。それはラングが、古い權威を倒さんとする力と、それを守らんとする力とが對立してゐた、當時の中國の社會の中で苦惱する人達を、その日常生活・戀愛・結婚といった身近な問題から捉えて記してゐるからであり、それは一に、家を通して中國人を理解しようとした態度「政治生活と家族生活の民主化のために闘いつゝある中國の新しい世代に對する私の同情的な態度」によると考えるからである。

こゝで本書の成り立ちを見てみると、この書はラングが一九三五年から三七年にかけて、ウィットフォード博士の指導の下に、太平洋問題調査會とコロンビア大學の協同主催で行われた中國社會實

態調査に参加し、之により得た資料を基礎にして記したものである。而してその資料は「北京協和醫學附屬病院の社會事業部による約四〇〇〇の記録からとつた患者記録と統計資料、北京・天津・上海・無錫・福建などで階級別、年齢別に行なつた面接調査、華北・華南・華中における一〇都市の二大學と八高校の學生から回答をとつた一七〇〇件の書面調査、福建と廣東における二六の同族について行なつた生活調査であり、その地域的範圍は、ソビエツト地區を除いて（之は非常に残念なことであるが）略々中國全土に亘り、その社會的範圍は、「各社會層を典型的に代表する對象をつかみえた」と考へて妥當な様である。この様に、調査が廣範に亘つてゐることも本書の價値を高める一つの理由であるが、更にこの調査が一九三五年から三七年にかけて、即ち現代中國史上の一つのエポックを畫す時期—西安事件、一二・九學生運動、蘆溝橋事件といった諸事件が續發した時期になされたことは、更に興味あることである。斯の如く時間的にも注目値する際に、豊富な資料を扱つて書かれてゐる所に、本書の人に迫つて來る所以があるのであるが、その資料の取扱ひ方その他に、若干の疑問が見られないわけでもない。

本書は「昔の中國の家族」と「現代の中國の家族」の二部から成り立っている。「昔の中國の家族」については、ラングは次の如く言つてゐる。「今なおいたるところに見出される古いもの、家族關係においては、かなりひどく動搖してゐるとはいへ、いまでもやはり無視しえない現實をなしてゐる。『儒教型』を説明するために、序論的に書かれたものである。」と。

元來社會學者であるラングが、序論的に書いたものに或はこれ以上を望むことは無理なことであるかも知れないが、この第一部には

多少の問題がある。先ずラングは第一章「國家と社會」で「中國は紀元前三世紀の中頃秦の始皇の時に、封建時代が終わりをつけて帝政時代がはじまつた」とし、この帝政中國の成立を、灌漑と水害豫防の爲の土木事業に求めている。而して更に帝政中國には幾多の王朝の交代はあったが、「基本的な社會構造はすっかり弱まつてはいても、政治・社會制度やイデオロギーには二一世紀もの長い間何の變化もせず、中國社會はいつも停滯してゐた。而してようやく現在になつてしふしぶながら新しい傾向に道をゆすりかけてゐるという狀態なのである。」と師であり、又夫でもあつたウィットフォードル張りの停滯論を提出して、その停滯性の中には、何等新時代への芽がなかつたとのべてゐる。こゝに示されたラングの論が、首肯し難いことはこゝに述べるまでもないことであらうから、こゝではこの點を指摘するに止めておくが、「昔の中國の家族」が、このような社會的基盤から出てくる「儒教型」としてのみ考えられてゐる所に、更に問題がある。

次にラングは、第二章「家族の機能と構造」において、中國の家族が決して今迄考えられたような大家族でないこと、又「家族共產制」といった概念も否定さるべきであるといった秀れた見解を述べてゐるが、ラングがこゝで繰り展げた家族の型の分類、これは第二部「現代中國の家族」とも大いに關聯を持つ事柄であるが、この分類には猶非常な疑問がある。一言にして言うならば、量的な差異に目を向けすぎて、質的なそれへの關心が不足してゐるように思われるのである。ラングは言つてゐる。「家族の構成はまたきわめて多様であるが、小家族と中家族と二種類の大家族とが主要な三つの型である。小家族はまた生物學的家族・自然家族・核家族あるいは小

家庭とも呼ばれ、夫と妻と子供によつて構成される。……中家族は両親とその未婚の子供たち及び一人の既婚の息子とその妻子から成る。……大家族は両親・その未婚の子供、その既婚の息子たちと、息子たちの妻子によつて構成される。」

果して斯の如き基準で、中國の家族を三つの型に分類して、中國の家族の問題が、精確に掴みうるであらうか。勿論量的な分類も一つの便法ではあらう。又、こゝには「昔の中國社會では、何よりまず社會・經濟的要因が家族型を規整する力であつた。」と社會的經濟的的要因を考へてはいる様ではあるが、それだけに又出生・死亡・婚姻、特に後者によつて變化し易い家族の成員に、固執するのはうなずけない。小家族なるが故に近代的家族であると言へるだらうか。ラング自身が言つてゐる如く、「理想を大家族に持ちながら貧困の故に大家族を構成しなかつた」からといつて、その小家族が近代的家族と同質と考へてよいのだらうか。私はこの點、大いに疑問を感じざるをえない。むしろ家族間の種々の關係等をも考察して分類されるべきではなかつたらうか。なお第一部には資料の選び方、扱い方、その他に若干の疑問や不満がないわけでもないが、こゝでは割愛することにする。第二部は「現代の中國の家族」と題され、これこそこの書の本論に當り、こゝでラングは、その豊富な材料を驅使して、議論をすゝめてゐる。第二部を通じて見た所、資料の整理にやゝ難點があり、まとまりを缺く箇所が若干見受けられる。併し第二部はその様な不満を越えて、何度も繰り返すようであるが、現實の生きた姿を取り上げているということが、高く評價されるべきである。而してこの中で最も私の興味を惹いたのは、結婚とネボティズムである。この兩者こそ特に人々に「家」という意識を再認識させ、

「重苦しい感じを起させる言葉であるからである。『親は慣習を楯にとつてたやすくはその權威をゆすらなかつたし、自己の權利を堂々と主張する勇氣をもつ子供はめつたにはないのだ。ことに農村では若い男女が自分で配偶者を選ぶといふことは絶対に不可能である。』」「弟に職を與えなければ親戚たちがうるさいので。」「理論的には、その仕事にもつとも適した志望者を採用すべきだ。だが、自分は利己的な人間だから自分の兄弟を選ぶ。」「それはよくないことだ、だが、自分の家族感情はそうせずにはいられない。」と言つたラングの意見や、ラングの質問に答へた言葉の中に、現在の日本の狀態と考へあわして、深く考へさせられるものがある。

最後に、勿論この書は所謂最近流行の見聞記とかいつた種類のものではなく、立派な専門書である。最初に述べた著者の三つの目的は、夫々成功を納め、而して若輩の筆者の見逃してゐる多くの秀れた成果が含まれてゐるであらう。併し筆者は、この書をそういつた専門的な觀點とは別に、民主化の道を、やゝもすれば後へ引き戻されようとしながら、歩み續けてゐる現實の立場から、見てもよいように思つて拙文を草した次第である。

(狩野 直禎)